

# 響 風

Hibiki Winds



浜木綿【夏井ヶ浜】

あしや句会

第 10 号

はじめに

「響の風」は、平成二十六年発行の九号から三年間発行していない。ホームページや製本を一手に引き受けていた夫が、多忙故に作成に時間を割けなくなったことが大きな理由だが、私自身も息子家族との同居生活や夫の単身赴任先の東京への往復など、生活のパターンが大きく変わった時期でもあった。

九号を読み返してみると、生き生きとした佳与子さんの句が目飛び込んでくる。その佳与子さんが、平成二十八年十二月三日の小春空に突然逝ってしまった。貝寄風発足の中心にいた人であり、九州貝寄風会と東京貝寄風会を結ぶ重要な人であった。本当に惜しまれる。毎月の自選三句は、今までと同じようにお互い送り合っていたので、平成二十六年からの三年間分を纏めることにした。佳与子さんは闘病と重なり投句のない月が多いが、体調の良い時は吟行句会に参加し、いつもの面白味のある句を作っていた。

わずか十七音の俳句であるが、句を読み返すと、吟行した一日がすぐに甦ってくる。

「あじさいの湯」「飯盛神社の流鏑馬神事」「宇佐神宮の勅使祭」「いのちのたび博物館」など心に残っている。特に宇佐神宮の勅使祭は、十年に一度の神事に行き当て、前夜祭の提灯行列に加わり、一人一灯の提灯を手に勅使橋を渡り歩いた。花火が揚がった空を眺めた後、宿の一室に四人で泊まった。

共に吟行し、句を作り、笑った一日の積み重ねが、思い出となり、自分自身の歩んできた人生を作り上げている。俳句を作りたくて入った俳句の道ではないが、俳句の縁をいただいたことと、温かい句友に感謝している。

平成二十九年五月

江本 由紀子

# 響風 第十号 目次

## ■はじめに

## ■吟行記掲載資料（抜粋）

## ■自選句

- ◇平成二十六年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- ◇平成二十七年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- ◇平成二十八年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
- ◇参加者の面々・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
- ◇檜田神社・博多祇園山笠・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
- 太宰府鷲替え、鬼すべ神事
- 十日恵比寿、節分祭、雛祭り
- 川渡神幸祭、みあれ祭、宇佐神宮勅使祭
- ◇掲載した著名人、「杞陽忌」三十年祭・・・・・・・・ 41
- ◇若松北海岸・芦屋、大宰府天満宮・政庁跡
- 福岡城址、小倉・戸畑・門司港
- 室見川、宮地獄神社、皿倉山・河内貯水池
- 宮崎宮、唐津・大村・糸島

自  
選  
句

平成二十六年

平成二十六年一月投句

しゃがみこみ初夢を聞く介護士の

弾初の一人の広さ遮音室

春隣カタカナの名のしゃれた町

初恵比寿済ませしシェフの笑顔かな

つまみ上ぐ煮凝箸にくずれけり

正門へ廻り直して初詣

大銀杏冬木となりて境内に

冬の日の影の大きなかくれんぼ

はずされしマスクほのかに紅のあと

寒卯東京五輪を見るつもり

母編みしマフラーを巻き祈願せる

寒木瓜や昼の花街の路地ぬけて

双子かもしれぬ大ぶり寒卯

大木の洞に凍てゐる銀杏の実

初夢の語る筋なき紙芝居

嬰兒の泣き声囲む聖夜かな

嬰兒の手に力あり年新た

寒晴の本丸風の吹きさらし

勝利

光子

佳与子

真理子

節子

由紀子

平成二十六年二月投句

【志賀島】

松明の届かぬ闇に海凍てる

早春の磯暮るるまで波ぬれて

寒風に白装束の禰宜が舞ひ

勝利

鳶の空島にひろがり草青む

真理子

星冴ゆる神楽囃の遠音かな

防人の歌を尽くして島おぼろ

海の中道の外海春のなみ

遥拝所越しの大灘つちふれる

春の風鹿角堂を吹き抜けて

節子

ひれ酒を一献島に再会す

由紀子

焼山やかかつて狼煙の上がりし地

退りゆく潮に岩場の石尊揺れ

島宮の絵馬古りしまま寒椿

わたつみに夕日のほむら春告げて

光子

【お休み】

佳与子

春潮に沈む夕日を惜しみけり

三毛猫の寝て陽炎ひのトタン屋根

初午や宝満山の晴れ渡り

従姉妹ですみな似てゐます春日向

勝利

青文字の花にあたたか登山口

真理子

雁帰る吾も新しき日に向ふ

直会へ手招きの禰宜あたたかく

林道のこれより続く花しどみ

早春の風袂はるる幣にかな

囀りを聞かせる電話耳にあて

節子

生きにくし世とは死ぬにも涅槃西風

由紀子

春煖炉ランチタイムは過ぎてをり

家の根繕うて夫赴任地へ

垣繕ふはずの父亡き一年を

炭浅く埋けてありけり春炬燵

光子

【お休み】

佳与子

あのあたり水城の森や青き踏む

横座る五指のソックス花の宴

寮生の頃の話も薔薇の卓

孫の手からかがみしばばに花吹雪

勝利

駒鳥の鳴き交す音に歩をゆるめ

光子

四月馬鹿子はアメリカに移住すと

山の湯へ届く郵便金鳳花

花ミモザキリン届かぬ高さまで

花を呼ぶ関西弁の九官鳥

新興の街新しき花名所

佳与子

鳥追いの竹の女に花吹雪

真理子

羽ばたける鳩花屑を舞ひ上げて

水音のくぐもるあたり初蛙

食卓を窓に片寄せ春惜しむ

花好きな父満開の花に逝き

谷沿ひの石楠花コース人増えて

節子

教え子に囲まれ通夜の春灯

由紀子

古池の鯉春水を動かして

山の湯の径の日向に春惜しむ

遠眼鏡丸き卯浪を近づけて

砂に書く文字を卯浪のさらひゆく

老ひ藤を負うごとく張る若き藤

勝利

麓より通ふ尼僧や余花のなか

光子

熊蜂の影の地上に落ちて失せ

轉をさへぎるものなき山に

休憩所形ばかりの夏暖簾

湖の卯浪古葭の屑を寄せ

間隔を取りつつ鵜の威嚇かな

佳与子

青嵐ひと雨を呼ぶ匂ひして

真理子

水かげろうゆれて彼女の夏帽に

つる薔薇の赤に連なる家二軒

子雀も人間の子もよく跳ねる

展望所までの木漏れ日奢我の花

母の日に妻となる人連れて来し

節子

一山を巡り一枝の余花に会ふ

由紀子

上りには気づかずに過ぎ余花の径

砂山にトンネル掘る児夏来る

ががんぼの脚だけ残り蜘蛛の網

釘刺さる地蔵の背に五月闇

握りをる蛍の光指を透け

勝利

故郷よりこの地に長く枇杷を食む

夏は来ぬと歌ひて山の音楽堂

実梅落つ落つるがままにこの頃は

光子

さくらんぼ食べ始めたなら止まらない

独楽のごと廻してみたしさくらんぼ

紫陽花に包み込まれしベンチかな

佳与子

山の湯へ背振嶺つづく合歓の花

かわほりの飛び交へる濛暮れ残る

地蔵堂高く祀りて梅雨の山

真理子

卯浪立つ海へ五分の渡船かな

高層のマンション映る代田かな

眠られぬ夜を通し鳴くほととぎす

節子

登り来し山あじさいに風青く

工場の煙消え入る梅雨の空

垂れこめし雲に遠のく時鳥

由紀子

平成二十六年七月投句

【金毘羅池周辺】

芭蕉の句揺れる風鈴南部鉄

母好む水引草の咲き初めし

夏料理しぶしぶと取る男振

勝利

占ひの灯の薄暗き夜店かな

真理子

書き終えし形代を風通り抜け

大波止へ夜店提灯つらなりて

炎天に下りし雀が痩せてをり

水底におたまじゃくしのゐて動く

工場の空き地ニガウリ畑となり

節子

藁しべを銜え青鷺又一羽

由紀子

亀の石軽鴨の石ほぼ決まり

うふといふ夢にまだ笑み昼寝の児

翡翠の戻りをしばし待つことに

草に置き道にも忘れ日傘かな

光子

【お休み】

佳与子

一万歩コースの標山青葉

平成二十六年八月投句

長雨に肩をすぼめて夏の鷺

その丘の手前に立ちし虹の脚

葉を分けて潜る暗きに茗荷花

千屈菜に母の鼻歌聞こえる

秋の蝉途切れ途切れに鳴き始め

傘立てに虫取り網と白日傘

七夕の笹に願ふは一つにて

抑留をわづかに語り盆の月

仏花きらさず育て花木槿

勝利

母見舞ふ花に加えて葎の花

病棟のロビー七夕笹の立ち

背振嶺の萱の綱引く盆祭

新盆や跡継ぎといふ重たき座

七年の義父との暮し白芙蓉

まだ義父の声聞こえさう夏座敷

光子

【お休み】

佳与子

節子

由紀子

平成二十六年九月投句

【太宰府 観世音寺 水城など】

足元の花に始まる花野かな

水城門在りし跡とや昼の虫

暮れ初めて熱き蕾の曼珠沙華

勝利

一枚はすでに捨田の露草に

真理子

天空に動物園や秋の雲

白萩の低く垂れたる旅人の碑

水城門跡発掘の草に露

晴れ渡る筑紫野の空今日白露

観世音寺梵鐘の陰茸出で

節子

発掘の水城の礎石つくつくし

由紀子

頭だけ見えて案山子の水城址

蔵町の菓子屋横丁こぼれ萩

八朔や男の子に馬の藁細工

待宵や髪ざらざらと指の間を

光子

【お休み】

佳与子

白萩に閉ぢられし門錆びてをり

平成二十六年十月投句

【飯盛神社

(流鏝馬神事)】

川曲る葦火も曲るあかね雲

谷に向く神馬の柵や秋祭

流鏝馬のいよよに鴟の高音かな

勝利

流鏝馬を駆け終えし馬汗光り

真理子

流鏝馬の的秋天へ弾け散り

寄進筵十枚とあり秋祭

三頭の試走始まり秋まつり

流鏝馬を待つ人垣や秋日濃し

コスモスの畑流鏝馬走り過ぐ

節子

流鏝馬の的射し音や宮の秋

由紀子

鉦叩右に聞えて左にも

流鏝馬の射手の横顔秋の日に

流鏝馬の射手七人や秋祭

流鏝馬の陰陽の声秋天へ

光子

【お休み】

佳与子

蹄音駆け上り来る秋祭

落葉搔日の温もりも籠に詰め

ギヤツと声落とし冬立つ鷺の空

もう粘りなき蜘蛛の糸風は冬

勝利

亡き犬の匂ひ嗅ぐ犬落葉径

真理子

軒下を猫小走りに初時雨

落葉掃きまた落葉して暮るゝかな

団栗の集まる森のくぼみかな

澄む水にひよいと魚を銜へし鵜

地下を出る階段に切れ秋の空

節子

四方より手締の声や酉の市

由紀子

サイカチの棘に刺しあり五円玉

愛想なき珈琲店主夕時雨

幸せは簡単なもの落葉掃く

モノクロの写真懐かし七五三

光子

【お休み】

佳与子

来ぬバスを蓮の実投げて待ちにけり

平成二十六年十二月投句

【小倉城】

放たれし鷹より猛し野の鴉

靴底をがりがり鳴らせ霰来る

フレームの枠だけ残り荒れ畑

車夫もまたポーズをとりて七五三

蜘蛛の糸からみし落葉よく廻る

クレーン止め煙草一服川普請

駅までのバス束の間の日向ぼこ

親を恋ふ猫の鳴き声冬の雨

帆柱山彼方に時雨れるるらしく

勝利

繕ひもの出して来にけり日向ぼこ

クッキーとココアたのみて日向ぼこ

セザンヌの絵を見て聖樹の銀座まで

旅の荷のひとつもなく鴨来る

背を丸め頭からっぽ日向ぼこ

冬の虫虚空さぐりて尺をとる

十二師団司令部正門冬紅葉

本堂をその影に入れ銀杏散る

読み解く連綿体や実南天

佳与子

真理子

節子

由紀子

自  
選  
句

平成二十七年

焼芋の焼き上がる前狙い付け

寒月の残りし朝のバス停に

野水仙揺れ遠山を景にして

勝利

鳥居には旧き町名初詣

光子

三極の一枝細く凍ててをり

戎笹掲げ珈琲店に入り

潮風にゆるる提灯初恵美須

つかと来て鈴鳴らしゆく仕事始

待春や味覚戻りし舌の先

佳与子

寒禽のひと声啼きてそれつきり

真理子

行く年や感謝の心忘れまじ

我ひとつ君ひとつ今日寒卵

若夫婦ピアノの上の鏡餅

寒晴や回転木馬動きだす

絵双六ばさばさ広げ始めけり

節子

焦らずとも願ひ叶ふと初みくじ

由紀子

餅花の赤白に赤飾り窓

寒の水足し鍛錬の墨を磨る

平成二十七年二月投句

【櫛田神社

（節分祭）

雉の眼の閉じし窪みや猟名残

四つ目垣に頭を預け水仙花

笹鳴の声高々と春立ちぬ

フードにも飛び込む一つ年の豆

ほうほうと声かけあひて猟名残

山容を浮かびあがらせ山火かな

園児らは前に集めて豆を撒く

豆撒の鬼に抱かれて泣く子供

同じ豆拾はんとして笑ひあひ

勝利

鬼やらふ声に小走り境内へ

撒かれたる豆の踏まれて追儼かな

一日に一つ事して寒明くる

福の門低くくぐりて節分会

大通り隔てし寺も豆を撒く

豆撒の都度に素通りできぬ友

佳与子さん来て恒例の鬼やらひ

大泣きに鬼も戸惑ふ鬼やらひ

木の芽吹く杞陽師系にゐる誇り

光子

真理子

由紀子

平成二十七年三月投句

【芦屋海岸 芦屋釜】

梅香る枝に浮き球ぶら下がり

春うらら関守石の丸き影

春うらら冬の制服重たげな

さ緑に染まる播りこぎ木の芽和え

海原へ流れし時報鳥渡る

春昼や居間に厨に電子音

玄海の波にまぎれて帰る鴨

春潮の波防波堤とくに越え

どこからも白き辛夷の見ゆる庭

勝利

待合の屋根にももの芽立ちにけり

漁小屋に鍵かけてあり鳥曇

落日に雲の湧き出で島おぼろ

木五倍子穂を垂れ初めてをり利休の忌

浜深く寄せある波や涅槃西風

外露地へ百年を経し山桜

三代経し白無垢飾る雛の間

誕生を祝ふ餅踏み山笑ふ

強東風や漁師たむろの船溜り

光子

佳与子

真理子

節子

由紀子

いつの間に鯨が亀に春の雲

フリージアその名を知りし初恋や

三宜楼出れば現の春の宵

勝利

水音の庭に聞こえて日永かな

光子

芳一の微かに仰ぐ春の闇

早世の彼に手向けしフリージア

夕風の岸边水母の浮いてきし

褪せてゆく日を海峡に春惜む

屈みみる七盛塚や春深し

佳与子

春帆楼コーヒー談議して日永

真理子

身をポンとはじきて女烏賊を売る

ベランダを飛び出す風の鯉のぼり

花びらがかけ上りくる下り坂

烏賊の足動くトロ箱うち重ね

がらす戸にゆがむ陽炎門司の町

節子

潮流の向き変り街かげろへる

由紀子

山の墓踊子草に囲まれて

八重桜満ちて敗戦烈士の碑

平成二十七年五月投句

【大濠公園 鴻臚館など】

大胆に絵具はみ出し新樹の絵

小次郎の陣羽織舞ひ卯浪立つ

鶯のホケキヨに体くねらせて

腹這ふて池を描く子園薄暑

置物と見違う鴨や園薄暑

十本の杭に三羽や通し鴨

大濠の真ん中に島松落葉

絡みつゝく昼顔柵に鴻臚館

菖蒲湯の菖蒲六束銭湯に

勝利

セルを着て仕立物屋の店の番

新緑のにほひ目つむり手をひろげ

ハヤの子のついと流され谷若葉

巢籠りの妻を守りてをりし鴨

芍薬の盛りも過ぎし鷹屋敷

母と浴む仕舞風呂好き菖蒲の湯

一雨の後のさみどり楠若葉

ジェラードにフルーツをのせ街薄暑

仮面付け踊る広場や月涼し

佳与子

真理子

節子

由紀子

平成二十七年六月投句

【宮地獄神社(菖蒲まつり)】

梅雨晴や茅花の絮を弾きみて

南天の花の縁先お針箱

花菖蒲閉じて赤子の手のやうに

勝利

南天の花に看取りの日々を聞き

光子

南天の花実に寄る鳥の話も出

菖蒲田の横に露地もの野菜売り

緑蔭に佇てば句帳を取り出して

初島は近く雲仙夏がすみ

花菖蒲一鉢つつが出店にも

佳与子

図書館の在りし記憶の茂りかな

真理子

運転す夏手袋は右手のみ

戦災の乙女像より夏の蝶

親戻るまでの静けさ燕の巢

途切れなき人神苑の花菖蒲

親を待つだけの一日燕の子

節子

さざ波の行き渡りたる植田かな

由紀子

入口に燕の巢ある小児齒科

黒南風の東京駅に着きにけり

平成二十七年七月投句

紅塵に千木を隔して夏木立

滝音を頼りに標なき道を

釣灯籠灯りて二つ梅雨曇

勝利

かなかなや御神楽殿に灯のともり

光子

女一人鳥居くぐり来夏木立

夏草に豊前筑前分かつ石

新しき蟬の抜け殻透けてをり

竹枕竹夫人片寄せし部屋

葛餅のゆれつつ皿におさまりぬ

佳与子

百合花粉またつけて犬戻り来し

真理子

飴色は旅館の歴史竹夫人

郊外の高校へ混む梅雨のバス

雨の蟻いっせいに幹下りはじめ

夫のもとへ行けとささやく青田風

追山笠に見入る人にも勢い水

節子

地上にも地下にも迷ひ拭ふ汗

由紀子

浮人形忘れた人の浮いてくる

炎暑より逃れ都心の地下通路

平成二十七年八月投句

近況を語り掛けをり墓灯籠

電柱に小枝集めてかちがらす

特攻のなにかも知らずかちがらす

勝利

秋立つや昼にぬるめの風呂をたて

光子

群青に思ひは深く川施餓鬼

家族のやうに暮らせし社宅盆の月

忘れぬし梅焼酎とやお納戸に

生きざまをひしとこの木に法師蟬

一升瓶ラベルも古りて梅焼酎

佳与子

捕えられ夏の一夜を籠に猿

真理子

看板の一字字隠し凌霄花

梅花藻の水底のふと夜空めき

鶺鴒とともに団地に住み馴れて

引越して来し新宿の大西日

故郷を吹き渡る風稲の花

節子

西日中人の流れに抗ひぬ

由紀子

競ひ合ふかに雨音の法師蟬

墓参して父の形見の碁盤拭く

平成二十七年九月投句

老ならん言ふてしまひて秋の風

倒木に咲く昼顔や野分後

スーパーを出て芋下げて夕茜

残り香の千人草や野路の秋

人寄れば秋の蚊少し増えてきし

飾り羽ゆらぎて風に池の秋

両の手にこぼれるほどの零余子かな

ぼろぼろと落とさぬように零余子摘み

芋虫に思いがけない力あり

勝利

山の湯の豊冷やか茶を淹れて

堰堤の塔に銘あり秋の風

みんなや新築なりし駐在所

土砂崩れありて迂回の葛の道

遅れ来る人やゝ不安野分あと

さり気なく見送りくれし草の花

大出家財投げ捨つ老の背ナ

奇遇とは真にこのこと涼新た

露けしや都心の地下の地下に人

光子

真理子

由紀子

平成二十七年十月投句

【宇佐神宮（勅使祭）】

秋あかねスクランブルの交差点

寺多き三田を経廻り秋一日

枝折りて柿ずっしりと竿の先

名月を隠しきれざる雲ひとつ

提灯の灯落とせば秋の風

土くれに落ちしむかごを見失ひ

勅使橋外も夜の闇秋の川

奉納の感応樂や秋祭

提灯の列秋風に進み出し

勝利

初秋の旅それぞれの駅を発ち

勅使待つ宇佐神宮や秋天下

寿命てふこともよぎりつ冬支度

鎮もれる闇の深さや宇佐の秋

提灯の列がミラーに曲る秋

神域の畦の匂ふや稲の秋

行列に我も一灯秋祭

秋水に口を禊いで祭使者

金風や勅使渡りし橋渡る

光子

佳与子

真理子

節子

由紀子

平成二十七年十一月投句

【武蔵寺 天拝山山麓】

天守閣小さく威を張りゐのこづち

城垣の勾配にあり秋の声

帰り花久女多佳子の句碑に佇つ

見送りて踵返せば時雨来し

風はらみきしむ幟や神の留守

柴漬を等間隔に沈め置く

落葉踏む音と遊具のきしむ音

朴落葉小さな谷を埋めつくし

いつからか石露の花咲く庭となり

勝利

切支丹墓地へと石露の花明り

新蕎麦と貼紙をして立つ亭主

菊活けて丸山花月灯のこぼれ

山茶花の庭に稻荷社祀られて

町名の残る古地図や石露の花

名島門抜けし城跡櫓の実

神渡し軍艦島に立つ祠

潰えたる立坑口に秋の風

高塀は花街の名残り実千両

佳与子

真理子

節子

由紀子

平成二十七年十二月投句

【小倉の街 鷗外旧居など】

靴音に水銀灯の寒さかな

重ね著をしてあいづちを打つばかり

燠白く匂ひたちたる堀炬燵

勝利

古曆節くれ立ちし手もいとし

光子

茶をすすめ子供自慢や冬籠

小春日の銀座楽しみ時計買ふ

見下ろせる駅の灯や年忘

ベンガラの鷗外旧居冬ざれて

細る川今日は一羽の冬の鳥

佳与子

行きそびれをりしうどん屋年忘

真理子

お洒落など言ふておられず重ね着て

走り根に足をかけたる冬山路

鷗外の小倉の夜を着膨れて

聖書館訪ふも銀座の十二月

集会の始まる聖樹入口に

節子

ブッフエの絵の黒き描線枯木立

由紀子

鵜来て双眼鏡の間に合はず

最終はモネの「黄昏」古曆

自  
選  
句

平成二十八年

雪が縫ふ旧街道の松並木

本職は郵便局長山始

而してごみを漁るや初鴉

勝利

先がけて咲く飛梅の白さかな

光子

燃え尽きるまで真っ直ぐに破魔矢かな

よく話し食べては笑ひ女正月

強風にどんどの山を小さくし

幣白き手斧掲げ禰宜山始

打ち鳴らす子等の太鼓やどんど焼き

佳与子

見渡せる筑紫あまねく冬霞

真理子

草原の石の温みや日向ぼこ

飛梅も咲いて宰府の人出かな

雪片となり我が庭を横飛びに

初雪や深川飯に湯気の立ち

よそいきの声で笑って初電話

節子

拝受せし御朱印七つ福詣

由紀子

新装の町家博多の能始

飛梅の一輪に足る一日かな

平成二十八年二月投句

【櫛田神社(節分)】

空を向く凍蝶の眼の碧さかな

縫ひかけの着物を膝に春を待つ

身に巣くふ病と共に春を待つ

勝利

木々ごとの木札新し梅とあり

光子

鶯に一瞬消えて沢の音

ふるさとに似て雪道の楽しかり

掛け持ちのわか芸者や節分会

マスクして禰宜休憩の社務所裏

カメラマン片手でキャッチ年の豆

佳与子

利休梅竹の添え木に芽を吹きて

真理子

祝唄調子はずれの節分会

遊具みなペンキぬられて下萌ゆる

午祭直会にまで長居して

本郷の坂の四辻にある余寒

恵方巻門前に売る節分会

節子

熱の児に添い寝する夜の雪しまく

由紀子

山菜萸の花のまわりで畑仕事

飛んで来し紅白の餅節分会

平成二十八年三月投句

【太宰府（曲水の宴）】

水底に光を揺らし春の風

筑波嶺に木の芽風吹く頃に会ひ

日時計の三時のところ下崩ゆる

勝利

命日もはや夕暮れて春炬燵

光子

むき出しの櫓の太し春炬燵

手に持つは宰府の梅や巫女の舞

曲水の盃に遅速のありにけり

曲水の盃引き寄せる竹を手に

屈まねば通れぬ梅の一樹かな

佳与子

白拍子梅がくれなる舞台かな

真理子

くぐる度梅の下枝に触れてをり

雑木山ささやき交わす木の芽風

曲水に沿うて敷かれし緋毛氈

金泥の絵より始まる雛展

曲水の宴に二人の衛士も立ち

節子

雛展津波に耐えし雛も置き

由紀子

図書館へミモザの花を見るコース

見上ぐること多き都心の陽炎へる

平成二十八年四月投句

【グリーンパーク 若松】

馬を吸ひ素知らぬ虻の眼の緑

金鳳華咲く野くづほれ地震つゞく

石楠花や蕾に初めし紅のひび

勝利

通院の合間の今日を野に遊び

光子

別れ来て蹴れば重たき花屑の

図書館の係居眠り日永かな

哺乳瓶くわえ眠る子花の下

鶯や丘に小人の街展け

場所取りのロープをゆらす花の風

佳与子

地震に関わることもなく春の星

真理子

花御堂作法を僧に訊きもして

葱坊主地震の余震の収まらず

地震に揺れながら春夜の警報を

草を食む山羊の鬚先春の泥

窓震え家軋む地震春の夜

節子

新宿の川に穴場のやうな花

由紀子

受話器手に校歌を歌ふ新入生

朧夜の町を一撃大地震

風巻きぬ葉桜うねり猷めき

樟落葉恐竜展の外は雨

繭の中でまどろんでゐる白日夢

勝利

ジオラマの恐竜展示こどもの日

光子

渡る風を乾かすやうな麦の秋

落としもの探して薔薇の径戻り

飛び立てる鳥の一群走り梅雨

恐竜の化石見し目を新緑に

梅雨雲を巻き込むやうに観覧車

佳与子

観覧車卵の花腐つ日も回り

真理子

籬より吠ゆる子犬や鉄線花

麦秋の中ことごとく地震の村

薬用の十薬水で洗ひをり

マンモスの歯に触れし掌の梅雨湿る

降りそゞぐ初夏の太陽天窓に

節子

葉桜の川にせり出す天守閣

由紀子

野茨の咲く坂行くが近しとか

光色堂出で新緑に深呼吸

平成二十八年六月投句

【管崎宮（紫陽花 菩提樹の花）】

片翅の羽蟻のあゆむ円ゆがめ

「唐船」の歌碑に静もる夏木立

はぐれ行く蛍の先に星赤く

勝利

色薄き夏萩風に咲き初めて

真理子

聴ひているはずの妹へと祭笛

ヒューズとび羽蟻の闇に瞬きぬ

蛍飛び始めましたと回覧板

涅槃絵の寺菩提樹の花満ちて

ダム底の村の記念碑梅雨に入る

節子

神紋の双葉葵や天下祭

由紀子

こんにやくと寺に売られて夏みかん

高層ビル囲む神社の夏木立

雪抱く飯豊はるかに桐の花

豆二列植ゑてはじまる朝かな

光子

【お休み】

佳与子

門々に紫陽花咲かせ社家の町

平成二十八年七月投句

夏祭いつもは見せぬ兄の眉

萍を押しわけ稲株太りゆく

花莫塵の天女とともに昼寝かな

日盛りの鳩電線の一本に

じじと鳴く蝉鶉に捕らえられ

薬塗る夫の大きな汗疹の背

始発出て山あぢさゐの夜明け色

白南風や米寿祝ぐ旅つつがなく

白扇の文字のやさしく形見なる

勝利

斑猫のくるりと誘ふ山稻荷

齡百超えてなほ山笠追ふ男

ベランダに育つ野菜や月涼し

入谷へと朝顔市へと早出して

梅雨雲の垂れ込む寺の雲竜図

羽化すでにし終りし蝉翅濡れて

真理子

由紀子

節子

【お休み】

佳与子

光子

縁者らの宴を離れ盆の月

炎天を来て炎天の屋上へ

脚開き過ぎて暑さや茄子の馬

勝利

百日紅延命地藏はその奥に

由紀子

ナイフより小さな鱧を捌きをり

透明な屋根に水輪や白雨来る

稲妻や遠くを見ることなく暮らし

戒めの言葉を額に盆の月

光子

【お休み】

佳与子、節子

供華のごと咲きし大樹の百日紅

稲妻の中を鴉の水平に

土塊を土笛に子ら夏休み

真理子

七夕の母体に育つ第四子

姉なのか母なのか問ひ浴衣連れ

霧湧きて相思鳥語る如く鳴き

てらてらと日差を歪め穴まどひ

勝利

穂芒や気流に任せ飛ぶ鴉

真理子

雲迅し来る颱風は明日未明

鳴き止めば躓く心地鉦叩

お団子の出るかも知れぬ月を待つ

老眼鏡借り糸通す鰯雲

キャンパスに元寇跡地草の花

節子

三食を作る暮しや草の花

由紀子

山小屋の夜や四方より轡虫

亀石の首向く先の葉月潮

元寇の防塁今に草の花

住み馴れし町を眼下に野路の秋

光子

【お休み】

佳与子

十五夜の真夜にやうやう雲間より

平成二十八年十月投句

【住吉神社（子供相撲 流鏑馬）】

瘦身のピエロが銜え紅鬼灯

子猫ゐる神饌田なりけり稲穂垂れ

木犀の香に惑ひつつ祝詞かな

勝利

秋祭馬を促す馬のゐて

真理子

草の花寄つて来るものみな小さき

のけ反りて狸とも穴熊かとも

田を前にケーキ屋二軒稻雀

細き子の勝ちに歓声宮相撲

校名を部屋の名にして宮相撲

節子

鶉の潜る潮入川に秋の風

由紀子

半纏に鏑の一字秋祭

磨崖仏御簾のごとくに霧下りぬ

流鏑馬の馬道にかかり初紅葉

龍笛の調べは雨に秋の宮

光子

【お休み】

佳与子

雨音の高まるばかり秋の宮

平成二十八年十一月投句

【春日公園 白水公園】

コンテナに向かふクレーン鷺のごと

竹ぼうき聞こえる奥へ紅葉路地

槌の音す風除の杭打ちをるや

かたまりて庭師休憩初時雨

石人に守られる墓冬紅葉

古墳へと低き生垣お茶の花

立冬の午後四時の陽の東京に

なつかしき人訪ふ秋の石榴坂

道迷ふまた山茶花の花に出て

勝利

仕事場の小さな鏡木の葉髪

猪鬃を確かめに入る山猟師

落葉掃く我に月掃く櫂かな

相寄ると思へば交差鴨の水脈

落葉搔土の匂ひも搔きあげて

粧ひし山より赤き月昇る

由紀子

光子

【お休み】

佳与子

平成二十八年十二月投句

冬木立大切な人ふいに消え

かの人の呼ぶ虎落笛風の音

人去りしを知りたくなくて着ぶくれて

勝利

カーテンにしがみて潜む冬の蜂

真理子

皿倉山（さらくら）の上に見つけし冬の星

犬匂ひ嗅ぎて丸める古毛布

濁点の如くビーンナス冬の月

ぽっかりと空席のまま年暮るる

橋くぐり飛びし一羽や尉鷗

節子

係留の鵜舟冬日の筑後川

由紀子

注連作募集の市政だよりかな

弟に絵本読む児へ毛布掛く

無人駅となり久しく冬ざれて

小春日や少しの恙良しとして

光子

約束の時に間のあり冬ぬくし

吟行記掲載資料（抜粋）

■参加者の面々

【二〇〇七年八月（千歳敷）】



【二〇〇八年一月（十日恵比寿）】

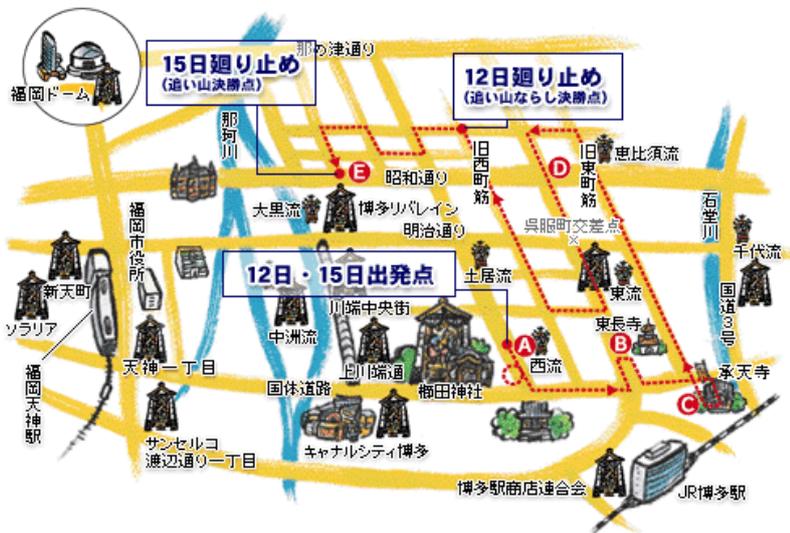


【二〇〇七年一月（十日恵比寿）】





■ 榎田神社・博多祇園山笠





■大宰府鷲替え・鬼すべ神事



■十日恵比寿



■節分祭・雛祭り



■ 川渡り神幸祭

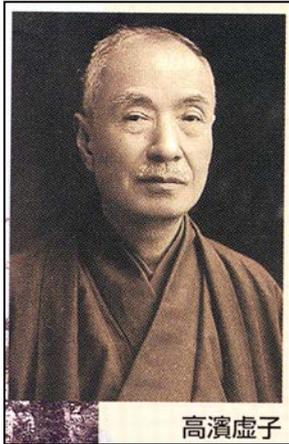


■ みあれ祭



■ 宇佐神宮・勅使祭

■掲載した著名人■



高濱虚子



【橋本多佳子】



【杉田久女】



【樽山荘（大正九年頃）】



【旧伊藤伝右衛門邸・白蓮の部屋】



【柳原白蓮】



【伊藤伝右衛門】



【火野葦平旧居・河伯洞】

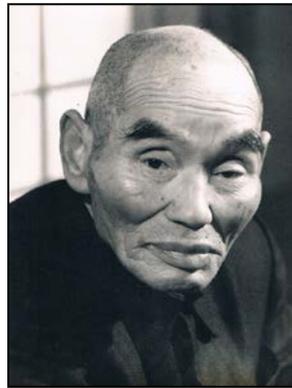


【火野葦平】

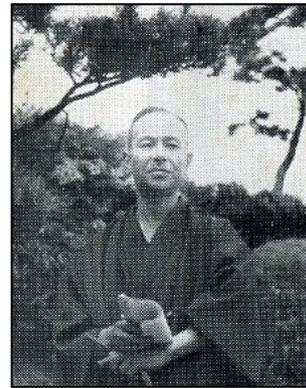
■掲載した著名人曰



【吉岡禅寺洞】



【河野静雲】



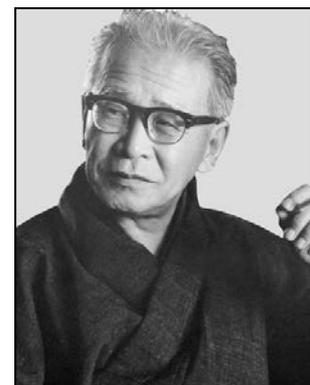
【清原栞童】



【竹下しづの女】



横山伯虹・松本清張 (森村誠一撮影)



【横山伯虹】



【森鷗外旧居（小倉）】



【森鷗外】

■ 掲載した著名人目



【「杞陽忌句会（平成二十三年十二月八日）】

■ 「杞陽忌」三十年祭



杞陽忌の句会で句を選ぶ参加者ら＝駅前区会館

【神戸新聞掲載（十一月九日）】

■ 若松北海岸・芦屋



■ 太宰府天満宮・政庁跡





■ 福岡城址

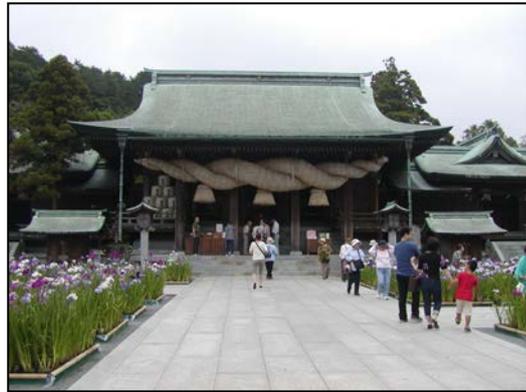
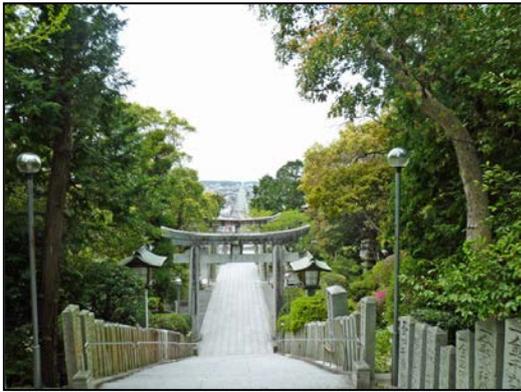


■ 小倉・戸畑・門司港





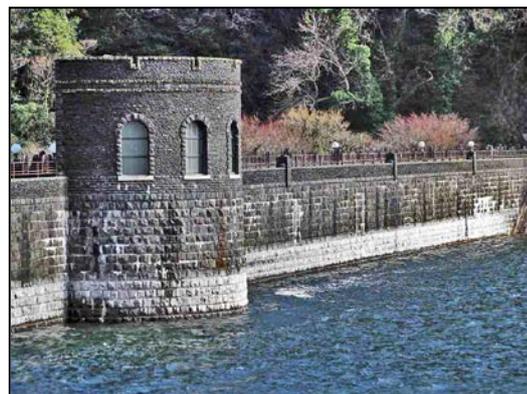
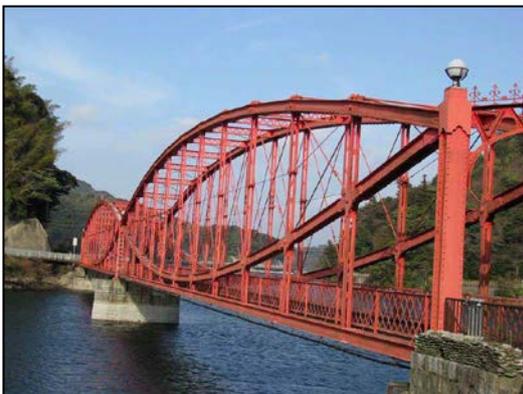
■ 室見川



■ 官地獄神社



■ 皿倉山・河内貯水池





■ 菅崎宮



■ 唐津・大村・糸島



響 風—Hibiki Winds—

あしや句会 第10号

平成29年5月発行

発行人 : 江本 由紀子

編集担当 : 江本 寛